

第3章 左右の観点からみた都市設計思想

前章までに記述したことで、歓楽街は「主たる人の流れ」の左方向に立地しやすいことをデータで示した。眼から入った情報が脳に伝わる時、右視野の情報は左脳へ、左視野のは右脳へ伝わる。左脳と右脳には情報処理に関し得意分野がある。左脳は言語情報・論理的思考が、右脳は図形情報・感情的な側面により優れていると言われている。そのことが人の感覚に影響し、絵画をみると、右下の空間に安定感を、左上の空間に開放感を感じることが多い。トラック競技では左回りに走り、狭い地下道では左側通行になり、肖像画では右向き左側面の顔を見せることが多くなる。

左脳・右脳の機能が個々人の行動や認識に現れることは言われてきた。本書では、その機能が多くの人に共通ならば、集団としてそれが表現されることを記述してきた。例として小教室におけるクラス授業での座席位置を挙げた。教壇から見て、右手前にはクラスで優秀な学生が、左後方にはおしゃべりをする学生が座っていることが多いと実感している。中心市街地においても同様のことが起きている。街の起点から主たる人の流れに沿って、あるいは右方向には、街における正統的な建物や店舗が立地している。デパート・銀行や、華やかさを求めるブティック、明るい雰囲気醸し出すファミリーレストランなどである。それに対し、左方向には、あるいはその奥には非正統的な店舗が立地している。スナック・居酒屋・バー・クラブ・キャバレーなどからなる歓楽街がある。北海道の都市を例にして、タウンページデータから、この主張を実証してみた。

上述したことを踏まえると、都市のあり方についても検討する必要があるだろう。とくに中心市街地の設計についてである。近年の地方中核都市の駅周辺は、みな同じような印象を受ける。広い駅前空間にバスターミナルが造られ、駅ビルや周辺のビルがあり、幅広い駅前通がある。少し歩くと、活気の薄れた商業店舗が続く。車社会になり、郊外のモールでショッピング。その結果が、中心市街地のシャッター街化である。それでもスナックと居酒屋を主とする歓楽街は、中心市街地に寂しく留まっている。比喩的に脳機能で表現すれば、論理的な思考に優れた左脳が郊外に、感情的な側面に優れた右脳は中心市街地に留まり、両者が分離した状態になっている。

そう遠くない将来には、自動運転という新しい世界が始まる。人は車を運転する必要がない。持つ必要もなくなるだろう。車は社会インフラとなる。そのような世界に適合する新しい街の設計が必要である。論理的かつ倫理面だけを強調する街ではなく、人の感性をも考慮した街づくりが必要になる。自動運転という技術が新しい街づくりをもたらすのではなく、自動運転をはじめとする近未来に実現する技術を利用して、地域住民の政治的意図が新しい街づくりをすることになる。国はそのための指針を準備する必要があるだろう。

以下では、1. 欧米の都市モデルにおける中心市街地について、なぜ右地区・左地区という観点が出てこなかったのか。西ヨーロッパの都市を歴史的に概観して考察してみよう。2. 自動運転が可能になる未来の都市のあり方について考える。

1 西欧都市の歴史的概観

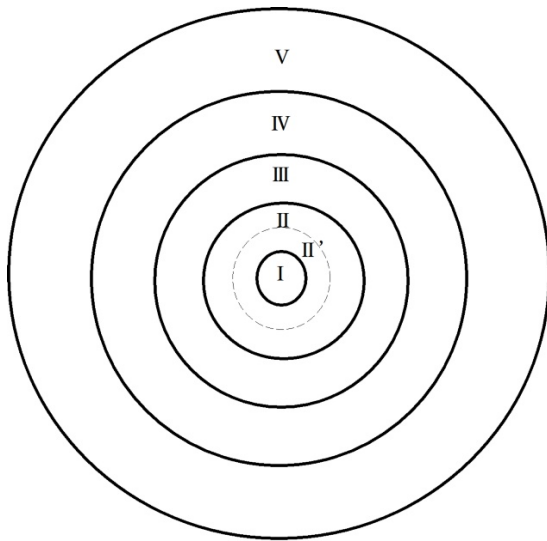
この節での問題意識は、中心市街地のモデルとして、なぜ今まで右地区・左地区という観点が出てこなかったのか、ということである。その視点から、関連する事項を記述しよう。

(1) 同心円地帯理論

都市理論に同心円モデルあるいは同心円地帯理論がある。E.W.バージェス『都市の成長』（1925年）により主張された。シカゴの都市空間を観察した結果、都市の空間パターンを5重の同心円によって表現した。図1-1に示すように、一番中心に(I)「中心業務地区」、ついで(II')「ビジネスや軽工業」が立地し、安価で劣悪な住宅地区でもある(II)「推移地帯」があり、その外側に(III)「労働者住宅地帯」、さらに中産階級の住宅地域である(IV)「住宅地帯」があり、一番外側には上級階級の郊外住宅地区である(V)「通勤者地帯」がある。アメリカ東部の都市に住んでみた経験から、中心業務地区からの距離により、立地機能が異なってくることは実感として理解できる。

このモデルには、円環状をなす同一地帯には同質の機能が立地している、ことが前提としてある。すなわち同一地帯はみな同質であり、左右という地域区分は存在しない。とくに本書で指摘する中心業務地帯における右地区・左地区という概念は、このモデルには存在しない。

図1-1 同心円地帯モデル



この理論に対し批判や修正が行われた。主な修正は、セクター理論と多核心理論である。セクター理論は、中心業務地区から放射線状に伸びる交通の軸線に沿って、高級住宅街や重工業地帯という特定の地域が外側に向かって扇形に展開している、と主張する。多核心理論は、ひとつの中心ではなく、複数の核を中心に土地利用が決まってくる、というものである。しかし、どの修正理論にも中心業務地区における右地区・左地区という観点はみられない。

このような同心円モデルが、なぜ主張されるのか。西欧都市の歴史的過程を概観し、都市設計思想を考えてみよう。

(2) 中世都市の成立過程

西欧の中世都市について、その成立過程を概観しよう。紀元前後の西ヨーロッパでは、イタリア半島を中心にローマ帝国が成立していた。その範囲は属州も含めて次のようである。a) アフリカ北岸・小アジアを含む地中海沿岸地域。b) ライン川の西側およびドナウ川の南側にあるフランス・ベルギー・スイスと、オランダ・ドイツ・オーストリアの一部。ここはガリア地方と呼ばれていた。c) スペイン・ポルトガルのあるイベリア半島。最盛期にはイングランド・ウェールズや、小アジアの東にあるメソポタミアまで支配していた。ガリア地方およびイベリア半島にはケルト人が、ライン川からドナウ川を結ぶ線の東側にはゲルマン人が居住していた。

ライン川はスイスアルプスからドイツ・フランスの国境を北に向かい、ドイツのボン・ケルン・デュッセルドルフからオランダのロッテルダム付近で北海に注ぐ川である。ドナウ川はドイツ南部のシュヴァルツヴァルト（黒い森）に端を発し、東から南東方向に流れ黒海に注ぐ川である。

4世紀から6世紀にかけてゲルマン人の大移動があり、ゴート族・フランク族・アレマン族などゲルマン諸族はライン川・ドナウ川を越えて、ガリア・イタリア・イベリア半島に侵入した。そのためローマ帝国は北辺領域を防衛する必要が生じ、多くのローマの都市集落であるキヴィタス *civitas* には囲壁がつくられるようになった。しかし、これらの都市集落は収縮・衰退を余儀なくされた。(河原温・池上俊一 KI『都市から見るヨーロッパ史』2021年放送大学教育振興会発行、p.30)(瀬原義生 SY『ヨーロッパ中世都市の起源』1993年未来社発行、pp.69-73)。

「キヴィタス」という用語は時代とともに内容が変化していく。当初は、ローマ帝国の属州における最末端行政単位がキヴィタスであった。それは都市集落と周辺の付属領域からなる行政区画であった。3世紀以降、内乱防止の観点から属州を分割して数を増やした。それにともないキヴィタスの数も増えた。また、防御のために都市集落の中心部を囲壁で囲むようになった。キヴィタスはその囲壁内の集落を意味することになった。(SYpp.20-21)。

ローマ帝国が消滅した中世になると、ローマ都市の遺跡・王宮・司教座・城砦などを中心とする市域をキヴィタスと呼ぶようになった。(SYp.7)。司教座とは、キリスト教が公認された後、ローマカトリック教会の重要ポストである司教が座る椅子を意味した。その司教座が置かれた聖堂はカテドラルと呼ばれている。イタリアではドゥオモと呼ぶこともある。

西ローマ帝国は476年に滅亡した。ローマ都市の多くは5世紀から7世紀にかけて消滅していった。それに代わって、新たな定住地が形成されてきた。それゆえ、多くの中世都市について、ローマ都市との直接の連続性は、一般的には否定されている。(KI p.43)。ただし、イタリアの諸都市はローマ時代の市街構造をそのまま伝えているものが多く、連続性を示している。イタリアでは古代末期・中世を通じて領域支配の中心は都市であり、実質的支配者である司教は旧ローマ都市に根拠をおいて活動をしていた。(SYpp.40-41)。

ローマ都市の消滅後に形成された新たな定住地として、ブルグス *burgus* あるいはブルグム *burgum* と称される集落がある。はじめキリスト教会はキヴィタスの囲壁外に建てられた。というのは囲壁内で死体を焼くことが厳禁されていたからである。市外に共同墓地

と、それを取り巻くキリスト教徒の集落が形成され、そこに礼拝堂が建てられた。キリスト教が勝利をおさめた後、司教座はキヴィタス内に移った。しかし修道士たちはそれに従わず、墓地教会のところに修道院を建てるのが流行した。修道院の設立は7世紀がその頂点といわれている。パリを流れるセヌ川を境にその西側にあるフランスでは6世紀末までに、その東側にあるフランスでは主として7～8世紀に修道院が設立された。

司教座聖堂は経済活動の中心にはなったが、修道院の経済活動も活発であった。土地所有に基礎をおく修道院の富力は手工業や商業活動を誘発し、修道院の周囲には活気に満ちた集落が形成されていった。それをブルグスといい、キヴィタスと対抗するようになった。このようにフランスの多くの都市は、キヴィタスとブルグスという二元構造をとることになった。(SYpp.75-77)。ちなみに、11世紀半ば頃から市民階級を意味するブルゲンシスが形成されてくる。(SYp.95)。それがやがて中産階級あるいは有産階級を意味するブルジョワジーという言葉につながる。

ライン川は古代末期において、ローマ帝国とゲルマン人との境界という役割をになってきた。それに沿って多くの城砦が築かれ、ところによっては大きな軍団が配置され、そこに都市集落が発生した。ライン川は豊かな流量と多くの支流網、広大な流域をもっているため、商業交通の幹線にもなった。必然的に商人集団による商業定住地が出現した。このように北海に面した主要な河川に沿ってできた交易定住地による都市集落を、ヴィクス vicus やポルトゥス portus と呼んでいる。(SYp.8, pp.260-261。河原温 KA『都市の想像力』pp.18-25)。

9世紀から11世紀にかけて、北方に居住していたノルマン人がヨーロッパ各地に侵入してきた。その防御として、ブルグスやヴィクスは自ら囲壁を設け、キヴィタスの囲壁を延長して、その中に包括されるようになった。囲壁を設けたヴィクスはブルグスと称された。(SYp.684)(KIpp.44)。したがって、ブルグスは城砦を意味するようになっていた。

中世の都市は、市壁により周辺の農村領域から区別された固有の都市域を形成するようになった。市壁の拡大や再建は防衛上の必要性和、都市の成長を見越した対応策であった。11世紀から13世紀までに多くの都市で、キヴィタスやブルグスという古くからの都市の核が周辺部と融合し、二次市壁を建設することにより都市域が拡張されていった。

パリでは1190年代からセヌ右岸地域の市壁が始まり1200年に完成した。左岸地域は1220年までに建設された。その後14世紀にさらに拡張され、近世まで存続した。(KIpp.94-96)。市壁の周囲は5.3kmで、壁の厚さは下部が3m、上部が2.2m、高さは8mであった。市壁の上部は巡回路になっており、監視用の円形の塔をいくつか備えていた。市門は右岸に6つ、左岸に5つあり、夜間は閉じられた。(KAp.74)。

パリの市壁については、パリ大改造の説明で後述しよう。ウィーンも同様に市壁撤去跡のリング大通が知られているので後述する。ここでは北イタリアの都市ミラノについて述べよう。ドミニコ会修道士ファイマン(1283-1344)の『大年代記』にミラノ都市図が付されている。厳密に同心円の構成をなす二重の円が市壁である。内郭は4世紀マクシミアヌス帝時代の市壁で、外郭は12世紀末に整備された中世の市壁である。市門は内郭に6門、外郭に16門がある。円の中心には市庁舎があり、少し離れて市庁舎よりも小さい宮廷が描かれている。これは自治都市としての表象になる。ミラノはルネサンス期の理想都市の1つの原形になった。(高橋慎一郎・千葉敏之編 TC『中世都市 ―史料の魅力、日本とヨー

ロッパ』東大出版会 2009 年発行 pp.49-51)。

(3) 中世都市の生活

中世の都市空間には、都市住民の家屋・店舗・庭園・畑などの私有空間と、誰もが立ち入れる教会・市場・広場・街路・市庁舎・ギルド会館などの公共空間があった。また、居酒屋・宿屋・娼家のような公と私の境界的な空間もあった。そのなかで、都市の本質的要素を構成したのは広場であった。12 世紀以前には、中心広場は司教座聖堂前に位置していることが多かった。12 世紀以降、都市政治の中心が司教座から都市自治体に移行するとともに中心広場はその位置を変え、商業と市場取引の中心となった市庁舎前の空間に形成されるようになった。さらに、フランドルの商業都市ブルッヘでは、市庁舎に面したブルク広場が中心ではなく、ギルド会館と鐘楼に面した大広場（ブローテ・マルクト）が中心になった。(KIpp.97-99)。ブルッヘはブルージュとも呼ばれて、比較的海に近いベルギーの北西に位置する街である。街中には運河が張り巡らされ、北海への玄関口として、イギリス・北欧と内陸とを結ぶ交易の一大拠点であった。ハンザ同盟の在外商館がおかれ、ギルド会館は街の中心的な建物であった。

都市の内外をつなぐ役目は市門である。市門は市壁の一部をなすとともに、キリスト教を象徴する建造物であった。市門の数は 12 や 7 というケースが多い。理想化された天上の都市エルサレムは 12 の門で囲まれている。したがって 12 という市門の数は、自らの都市を聖なる天上都市に一体化させようとの意図がみえる。市門には都市の守護聖人の像や聖遺物を掲げる習慣もあった。(KIp.96)。西洋中世の人々にとって、エルサレムは巡礼の究極の目的地で模範とすべき理想都市であった。エルサレムを世界の中心に位置づける伝統思想があり、各地にそれを模す小聖地がつくられた。(TCpp.142-151。KApp.40-43)。

市壁に囲まれた中世都市は狭小な空間であり、そこに多くの人が集まって住んでいた。都市の形はいろいろであるが、楕円形に模して、地図と縮尺のある都市について長軸・短軸の距離を概算してみよう。ベルギーのトゥールネ 1km×0.65km。(KIp.42)。北フランスのアラス 1.7km×1km。(KIp.43)。南フランスのアール 1.5km×0.7km。(KIp.44)。ブルッヘ 2.7km×2km。(KIp.100)。ケルン 3km×1.6km。(SYp.288)。現在の日本で言えば、地方都市の中心市街地の大きさと言えるだろう。ブルッヘとケルンは少し大きな都市と言える。

1300 年から 1350 年頃のヨーロッパの個別の都市人口規模は、同時代の中国やイスラム世界の諸都市に比べ圧倒的に小さかった。8 万人以上の「特大都市」はパリ (8～20 万人)、ミラノ (10～15 万人)、フィレンツェ (10～12 万人)、ベネチア (12 万人)、ジェノバ (10 万人) である。4 万人以上の「大都市」がヘント (6.4 万人)、ケルン (5 万人)、ロンドン (5 万人)、ブルッヘ (4.6 万人)、ピサ (4 万人) である。これに続く地域の「首座的都市」が人口 1～4 万人規模、「中都市」は 2 千人～1 万人、「小都市」は 2 千人以下である。(KApp.58-60)。

多くの都市では低層の木造家屋が一般的であったが、パリ・ヘント・フィレンツェなど人口稠密な都市では、13 世紀以降、高層建築が増加し、4～5 階建ての木造住宅が建てられていった。(KIpp.108-109)。

市壁に閉じこめられ、狭小で多くの人が行き交う街路は、泥・汚物・ごみで極めて不衛

生な状態にあった。12 世紀末のパリの街路について、『サン・ドニ年代記』のエピソードがある。国王フィリップ 2 世はシテ島の王宮にいて、部屋の窓からセヌ川を眺めていた。その瞬間、馬車が街路を駆け抜けていき、道路に充満していた泥や汚物をかき混ぜ巻き上げたので、耐えられない悪臭が王のいる窓辺まで立ち上ってきた。そこで、フィリップ 2 世は命令をだし、パリ右岸の主要な道路を舗石により舗装させた。13 世紀末のロンドンのメイン・ストリートも舗装された。15 世紀においても、多くの都市では主要道路以外の道路は、狭く不衛生であった。豚をはじめとする家畜が都市でも飼育され放し飼いにされていて、その臭気と不潔さは危険でもあった。14 世紀以降、フランスの都市では、都市内での豚の飼育の禁止令が出された。(KIpp.119-121)。

16 世紀の都市でも、農村的要素を色濃くとどめていた。L.フェーヴルの記述から抜粋し要約してみよう。「16 世紀フランスには近代的な意味での都市など存在しなかった。都市は円筒形の塔で要所を固め、狙撃用銃眼のついた城壁が周囲を隈なく囲んでいる。都市へ向かう一本の街道が狭い市門へと通じている。その手前には濠に架けられた跳ね橋があり、右手には十字架、正面の小高い丘には不釣り合いに大きな絞首台がある。市門を入ると、道の中央の凹みには下水が流れ、肥溜めから溢れだした水肥が細流となっている。雨が降ればぬかるみとなり、日照りになれば、息もできない埃ぼさ。子供・豚・家鴨・雌鳥・犬が一緒くたになり路上を転げ回る。どの家にも菜園があり、屋根裏に納屋がある。パン焼き竈があり、牛や羊を入れる家畜小屋がある。これが都会なのである。農村が町に押し寄せ、家の内部にまで入り込んでいる」。(L.フェーヴル著、二宮敬訳『フランス・ルネサンス文明』昭和 56 年創文社発行 pp.9-11)。

中世における主要な連絡路である市道は、広場・公共建築・市門・間道入口・波止場などに通じていた。多くの都市で、その道幅は 2~5m であった。アヴィニョンの馬車道は 2.5~3.5m、主軸路であるドロワット・ド・グラス通りは 2.6~6m である。ルーアンの道路は 4~7m、レンヌの賑やかな交通路であるヴィレーヌ川右岸の船着場にいたる道路は 2.3m であった。また、大聖堂や市場付近の通りは狭くて、道路というよりは通路であった。この時代には、主軸路は 3~4m が当たり前であり、主軸路以外は 1~2m の狭く不潔で光が射さない道が普通であった。(ジャン・ピエール・ルゲ著、井上泰男訳『中世の道』白水社 1991 年発行 pp.8-12)。

中世都市の特徴は次のようにまとめられるであろう。a) 市壁に囲まれた狭い空間である。b) 中心広場が街の最重要な場所であり、その近くに政治的に重要な建物が位置している。中心広場では定期市や各種イベントが開催されている。c) 中心広場に通じる主要道路は 15 世紀頃になると舗装されてきたが、それ以外の道路は狭く不衛生である。d) 都市の外に通じる市門の数が 7 とか 12 とか多数ある。

市門に通じる道は中心広場と結ばれていると想定される。市門は複数あり、中心広場から市門に向かう人の流れは複数ある。主たる人の流れが一方向だけではなく複数ある場合には、右地区・左地区という感覚は生じない。右地区・左地区の感覚が生じるには、主たる人の流れの起点が一つあり、その流れが一方向に定まることが必要である。さらに、道路は不衛生であるので、道路に沿った両側の地区に特徴ある施設ができるとは思われない。道路は単に通り抜ける道に過ぎない。

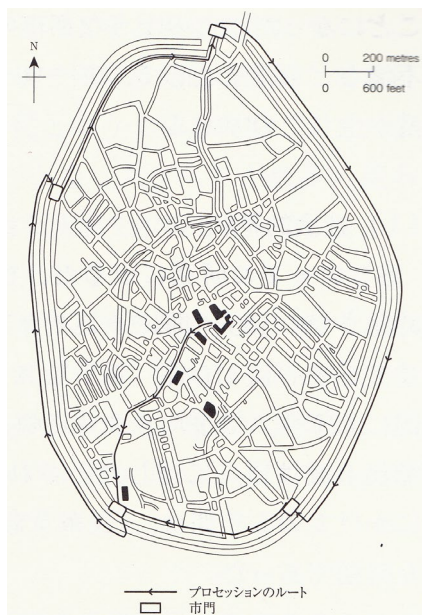
「道路は通り抜ける道に過ぎない」に関連して、黒川紀章は「西欧の都市に道（空間）

はなく、東洋の都市に広場はない」と述べている。(黒川紀章 KK『道の建築』昭和 58 年丸善株式会社発行、p.iii)。その主旨は次のようである。東洋の祭りは「広場」に集めて行われるよりも、練り歩くことを主体としている。練り歩くための「通り」が必要であり、寺社や公共施設も集中して中心部におかれるよりも、「通り」で結ばれる配置になっている。ここで「通り」を「路」と呼び、それより狭いのを「道」と言い換えている。すなわち、東洋では「路」に沿って公共施設が分散配置され、「路」自体が都市の公共空間として機能している。3m にも満たない「道」の両側の町は、「道」に対し開放的な建築形態をとっており、人々の歓談の場であり、個々の生活をつなぐ空間であった。この「道」の場面は、京都の町屋の路地をイメージして述べている。

それに対し古代ギリシャの都市は、中心部に求心的な公共空間アゴラをもつ。その広場こそ市民の生活を都市の政治に結びつけ、都市意識へと高める空間であった。「路」から住居にはいると中庭があり、それぞれの部屋はこの中庭に対して開いているが、「路」に対しては閉鎖的である。また、1~2m の「道」には排水路が設けられ、個々の生活をつなぐ空間ではなかった。(KKpp.5-8)。したがって、西欧の都市には生活をつなぐ空間としての「道」はなかったと述べている。ここで、古代ギリシャの都市を中世の西欧都市と読み替えてもよいであろう。

西欧の祭りとして、中世ブルッヘのプロセッションの例がある。プロセッションは、守護聖人の祝日に聖人の聖遺物をともなって練り歩く宗教行列である。ブルク広場から出発して、市門を何度も出入りし、都市の市壁の内外を一周する行進である。これにより、ブルッヘという都市空間と都市共同体を「キリストの聖血」によって浄化するという象徴的役割を果たしていた。(KIpp.116-117)。日本の祭りの感覚から言えば、街中を練り歩くことによって、祭りの意義を示すことが通常である。中世西欧の都市では、練り歩くような街中がなかったから市壁の周りを歩いたともみなされる。

図 1-2 ブルッヘのプロセッション



(出典: 河原・池上『都市から見るヨーロッパ史』p.117。これは T.A.Boogaart II, *Our Saviour's*

(4) ルネサンスの理想都市

ルネサンスは主として 15 世紀および 16 世紀である。ルネサンス期の都市論に影響を与えた書物として、古代ローマのウィトルウィウスが紀元前 30 年前後に著した『建築書』が挙げられる。その書に都市建設に関する記述がある。概要は次のようである。「理想的な場所が選ばれること。高い場所で、暑くも寒くもなく、市民を養うのに十分な収穫があること。交通の便が確保されること。これらの条件を満たした上で、防衛を目的にして頑丈な壁で囲み、塔で補強しなければならない。城壁の形は方形や突稜形ではなく、敵をどこからでも見通せる円形でなければならない。都市内部に通りが敷かれ、神殿や広場の位置が決められるが、海に沿った町では港近くに、内陸であれば町の中心が選ばれる」。(中嶋和郎 NN『ルネサンス理想都市』1996 年講談社発行 pp.12-13)。

ルネサンスの最初の建築家はブルネレスキ (1377-1446) だと言われている。彼は透視図法により、3 次元のものを 2 次元の紙の上に表す方法をはじめて科学的に定義した。(NNp.15)。たとえば直方体を 2 次元に描いて、立体感をだす方法を考えてみよう。平行な稜線を無限に遠くに延長すると、眼には一点に収束するように見える。それを消失点という。消失点は眼の高さになる。部屋の内部を立体的に描くには消失点は 1 つでよいであろう。建物であれば、右方向と左方向の 2 つの消失点で表せばよい。さらに上方の消失点を加えれば、塔が立体的に見えるだろう。

ブルネレスキの透視図法が具体的にどうであったかは定かでない。しかし、彼の考えを建築設計のプロセスに適用すると、3 段階に分けることができるという。すなわち、建築物の正確な形態を決めること、その形態を比例・スケール・材料・色と順次決定していくこと、柱・梁・アーチ・扉・窓の構成要素を定めることである。(NNp.16)。

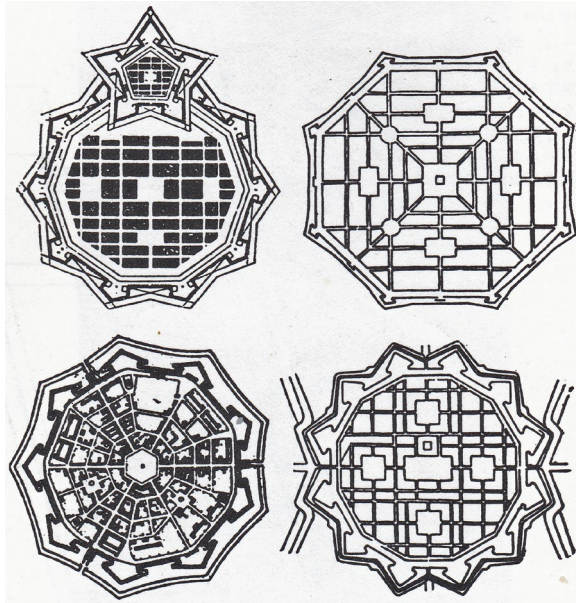
ブルネレスキの考え方を一般化したのはアルベルティ (1404-1472) である。アルベルティはウィトルウィウスの建築論を踏まえながらも、時代に適用できるように彼自身の建築論を著した。(NNp.18)。その建築論の指針として、建物における比率の正しさと、建物と人体の類比という 2 つの指導原理を基礎においた。(KI p.175)。アルベルティの考えでは、「建築家はただの大工ではない。すべての学問を理解し、優れた理性と方法で実際に建設する者」である。建物を造るときには、職人たちの経験から闇雲に始めるのではなく、まず設計の段階で比例に基づいた美的概念をもち、透視図法により図面を描き、木や粘土で模型を作らなければならない。ここに、近代的な建築家の出現をみることができる。思想家および芸術家になった建築家の発想からは、「建物に適用した論理と美的尺度はすべてのものに適用できるから、都市も建物と同じように、すべての部分がデザインできる」という考え方が生まれた。(NNpp.14-15)。都市論におけるこの論理的・合理的な思考、言い換えれば左脳の側面を強調した考え方は、近代にまで引き継がれることになった。

アルベルティの考えた理想的アイデアは、既存の都市に対しては部分的な変更にとどまった。(NNp.38)。彼に続く建築家たちは、彼の影響を受けながら、部分的に建設可能なモデルを提案していった。(NNp.44)。15 世紀末に、大砲の弾として石の代わりに鉄が使用されるようになり、弾を放つのに火薬の爆発力が利用されるようになった。従来は高い塔が城壁を支えていたが、鉄の弾に耐えられなくなった。城壁全体を低く頑丈にし、戦いに

必要な施設と、十分なスペースを備えた広大な稜堡が建てられることになった。16 世紀後半になると、軍事目的のために、形態的に完璧で規則的な配置をした要塞都市が計画されるようになった。(NNp.54)(KIpp.173-187)。

理想都市として描かれた図のうち 4 つを掲げよう。どの図にも共通であるが、中心広場から市門に向かう人の流れは複数ある。したがって、主たる人の流れが一方向だけに定まることはなく、右地区・左地区という感覚は生じえない。

図 1-3 ルネサンス期の理想都市図



(出典：黒川紀章『道の建築』 p.14)

(5) パリ大改造

多くの都市において、市壁のすぐ外に広がる城外区が形成されるようになった。早い都市では 15 世紀から、また、17 世紀には本格的に拡大していった。城外区では、市壁内の住民の食料調達や必要物資の生産に携わる人たちが住んでいた。当初は都市と城外区ははっきりと隔てられていたが、18 世紀になると両者は一体化していき、市壁が解体されるか、崩れるままに放置されるようになった。その背景として、王権の一円支配が進展し、都市が自らを守る必要がなくなったことがある。また、壁の維持修理には費用がかかること、経済の発展につれて壁が人や商品の通行の妨げになったからである。(KIpp.236-239)。

パリを例にとり、市壁の建設と解体、および都市の改造について記述しよう。市壁の概略については図 1-4 に示している。パリを流れるセーヌ川は、パリ周辺から河口にかけて大きく蛇行している。パリの中心であるシテ島付近では、セーヌ川は東から西へ流れている。その北側が右岸で、南側が左岸になる。

ローマ時代にはシテ島にキヴィタスが置かれ、囲壁が建造された。シテ島の形はさや豆のようであり、横幅最大 250m×長さ 1km である。囲壁内は 8ha ある。1200 年前後になり、フィリップ 2 世（在位 1180-1223）は右岸・左岸を囲む「フィリップ・オーギ

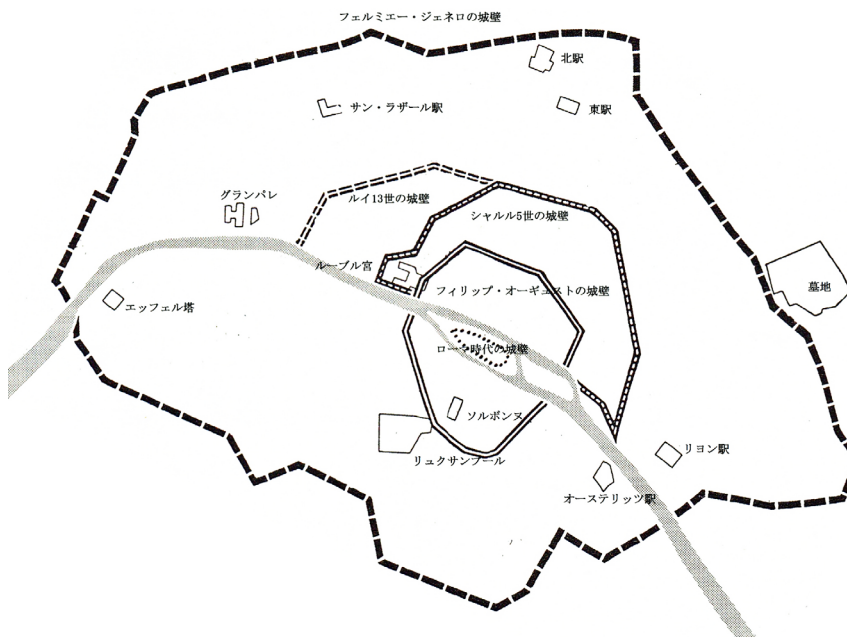
ュストの城壁」を造った。彼は主にイングランド王国のプランタジネット家との抗争に明け暮れていた。

1300年代から1400年代にかけて、フランス王国と、フランスに広大な領地を有するイングランド王国とのフランス貴族間での百年戦争が行われていた。シャルル5世（在位1364-1380）は右岸に城壁を築いた。城壁の西端はルーブル宮を囲うようになり、東端はバスティーユ要塞になる。約200年後にルイ13世（在位1610-1643）は、「シャルル5世の城壁」を西側に拡張した。当然、城壁の内側になる元の城壁は取り崩されることになった。

ルイ14世（在位1643-1715）は国内の叛乱を押さえ、対外戦争に勝利し、国内外を安定させて、絶対君主制を確立した。彼は1670年に「シャルル5世の城壁」と「ルイ13世の城壁」を解体し、その跡地に「グラン・ブルーバール」という「大通り」を造った。

1789年フランス革命の直前期に、「フェルミエール・ジェネローの城壁」が造られた。これはパリに入城する商人たちから徴税する目的で造られたので、「徴税請負人の柵」と呼ばれている。この城壁はオスマンのパリ改造時に解体された。さらに1840年代には、現在のパリ全域の範囲をカバーする「ティエールの城壁」が造られた。これは外国の軍隊がパリに侵入することを防ぐ目的であった。第1次大戦後に解体された。

図1-4 パリの城壁



（出典：松井道昭『フランス第二帝政下のパリ都市改造』の「パリの拡大」図を加工）

ナポレオン3世の第二帝政期(1852-1870)に、セーヌ県知事（在位1853-1870）であったG.E.オスマン(1809-1891)は、パリの大改造を行った。オスマンの都市計画は、無秩序に入り組んだ道路網をほどいて抜本的に整理し、都市の美観を取り戻すこと、過度の密集を取り除き、通気・空間・公衆衛生を確保すること、失われた緑地を取り戻すことであった。街路は単に移動するための手段から、見て楽しむものに目的を変えた。見る対

象としての道路は眺望がたいせつな要素である。対称性・直線・計算された曲線・幾何学的な模様が要件になる。パリはすでに百万を超える人口をかかえていた。その都市を生活させながら、計画を実行しなければならなかった。(松井道昭 MM『フランス第二帝政下のパリ都市改造』日本経済評論社 1997 年発行、pp.151-152)。

街路の整備にあたって、a) 古い街路を拡幅し直線化を図ること、b) 幹線道路は複線化によって交通循環をよくすること、c) 重要拠点は斜交路によって接合すること、の 3 つの原則を定めた。最初に取りあげたのは東西・南北の幹線を都心のシャトレ広場でクロスさせることであった。東西方向では、セヌ川の北側に並行するリヴォリ通を基準に、西端のエトワール広場から東端のバスティーユ広場まで、約 5.5km のほぼまっすぐな大通りを造ることである。南北方向では、東駅からセバストポール通を南下し、シテ島を通過して左岸のリュクサンブール公園まで、約 3.5km のまっすぐな大通りを造ることである。さらに、グラン・ブルーバールを含む同心円状のバイパスや、斜交路を組み合わせた。市中のいかなる場所においても、目的地へ容易に移動できるようにした。(MMpp.185-186)。

リヴォリ通を西へ進み、コンコルド広場からシャンゼリゼ通を行くと、エトワール広場に着く。そこには凱旋門がある。エトワール広場は半径 140m の円形で、その外側に同心円状の道路が走っている。広場はロータリーになっており、そこから幾何学的に整った 12 本の道路が放射線状に走っている。(MMpp.200-201)。リヴォリ通を東に進むとバスティーユ広場に着く。その広場からは幾何学的には整っていないが、何本かの道路が放射線状に走っている。バスティーユ広場からさらに 2km 東へ行くと、ナシオン広場がある。そこはエトワール広場ほど広くはないが、外側に同心円状の道路があり、幾何学的に整った放射線状の道路が走っている。

中心市街地を右地区・左地区の観点からみると、その兆候は見えない。というのは、東西・南北の起点がシャトレ広場であっても、主たる人の流れが一方向に定まらないからである。エトワール広場や他の地点でも同様のことが言える。

オスマンのパリ改造に対する称賛はもちろんあったが、批判もあった。古い町や不潔な建物を壊したときに、立ち退きを強いられた貧しい職人や労働者は、家賃の高騰したもとの地に帰ることができず、古巣を捨て、より不便な、より汚いところに追い立てられる結果となった。また、パリの古い街並みは不衛生で狭苦しく、ごみごみしていても情緒にあふれていた。それを破壊し味気ない街にしまった、などである。(尾崎和郎 OK『ゾラの「饗宴」とパリの大改造 (下その一)』成城大学文芸学部編「成城文藝」1992 年発行 138 号 p.65。MMpp.357-361)。

オスマンによって作られた新しいパリの美しさは、直線道路とその突きあたりに壮大な建物が屹立している風景である。彼はノートルダム寺院・凱旋門・オペラ座が目立つような街造りをした。しかし、直線道路に対する非難は多かった。画一化されたパリは、地域ごとの差異、その風俗、特有の話し方を失い、どこへ行っても変わり映えのしない街になってしまったと非難された。(OKpp.67-68)。

パリ改造への称賛は論理的・合理的な街造りの美しさであり、批判は情緒や多様性を無視したところにある。脳機能との対照でいえば、パリ改造は左脳の側面を強調し、右脳の側面を無視したとも言える。この傾向は現代にまで続く問題点である。

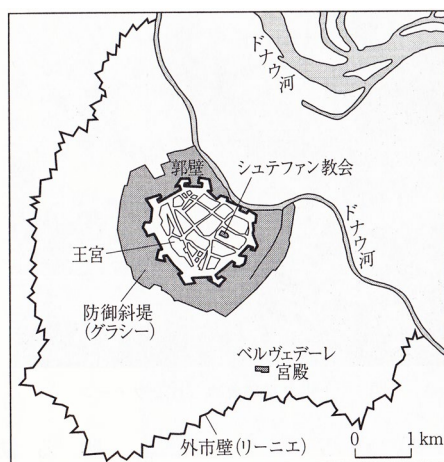
オスマンの都市改造は「オスマニザシオン（オスマン化）」と呼ばれ、フランス国内外の多くの都市に影響を与えた。国内ではマルセーユやリヨンなどである。国外ではブリュッセル・マドリード・バルセロナ・ローマ・ウィーン・ストックホルムなどである。(OKpp.53-60)。ここではウィーンの都市改造を取りあげよう。

ローマ帝国はゲルマンの攻撃に対し、ライン川・ドナウ川沿いに軍事拠点をいくつか設けた。その一つとして、ドナウ川とウィーン川の交わるところに兵士を駐屯させた。それがウィーンの始まりといわれている。(田口晃 TA『ウィーン 都市の近代』岩波新書 2008 年発行、p.4)。ウィーン川はウィーン旧市街の東端を流れる川である。

ウィーンは 13 世紀後半から第 1 次大戦までの間、ハプスブルグ家によって支配されていた。ウィーンに市壁が設けられたのは、1529 年にオスマン帝国の軍勢がウィーンを包囲したことが契機となった。市壁はレンガで作られ、要所に五角形の稜堡を 10 基造り、堀で囲んだ。その外側に緩い勾配をもつ 500m 幅の無人地帯である防御斜堤が造られた。(TAp.13)。

1683 年に再びオスマン軍に襲われたが、それを防御し追撃に成功した。それはハプスブルグ帝国がハンガリーからバルカンまで拡大するきっかけにもなった。ウィーンはそれまでの辺境の防衛拠点から、ハプスブルグ帝国の中心に位置する首都であり、国際都市になった。1690 年代になると、市内は建築ブームになった。それと同時に市外の下町も繁栄した。1704 年にハンガリーでカルバン派の叛乱が起きた。それにより、下町と外側の郊外地区との間に外市壁を築くことになった。安全になった下町には多くの住民が住み着くようになった。(TApp.16-18)。

図 1-5 中世・近世のウィーン



(出典：田口晃『ウィーン 都市の近代』p.18)

1749 年にマリア・テレジアの治世が始まり、絶対王政が確立した。その後を継いだヨーゼフ 2 世は啓蒙専制君主と言われている。産業育成策がとられ、新たな経済の担い手として産業市民層が台頭してきた。文化活動とりわけ音楽は隆盛を極めた。ハイドン・モーツァルト・ベートーベン・シューベルト・シュトラウス父子・ブラームスなど、音

楽家は百花繚乱であった。(TApp.21-27)。

ウィーンの人口は 1800 年の 23 万人から、1848 年には 43 万人に増加した。市壁はナポレオン戦争で無用の長物であることが分かったが、撤去には踏み切れなかった。外市壁は、市内に持ち込まれる飲食料品に課税するために必要であった。その結果、貧しい労働者は下町にも住めず、郊外地区に追いやられた。(TApp.27-28)。

1857 年にフランツ・ヨーゼフ皇帝は、城壁の撤去と、その跡地にリング大通の建設を命じた。特別委員会が設置され、リング大通と、その外側にラスト通、さらに腰带状環状道路も加えた同心円状の 3 重道路が、将来構想とされた。当面は、市壁と防御斜堤を解体し生じる 240 万 m²の土地のうち、道路・広場・公園用地に 150 万 m²、公共建築物用地に 40 万 m²、残り 50 万 m²を民間払い下げにした。リング大通は幅 70m 道路になった。(TApp.56-59)。

リング大通沿いには、各分野の公共建築物が集中している。公共性の代表である王宮は宮殿を拡張し、新宮殿・英雄広場・城門を新設した。公共建築物の様式はさまざまであり、それを当世風にアレンジした。環状の大通から下町に向けて外に延びる 8 本の道路は放射線状ではあるが、従来の道路を利用して、昔通りに曲がりくねっている。(TApp.60-70)。右地区・左地区の観点からみると、「主たる人の流れ」の起点も方向もみえない。ただし、散策には面白い街並みになっている。